

4-1 初めて3年目：量から質が問われる段階に入っていく子育て支援

平成6（1994）年に開始された地域子育て支援センター事業は、支援センターとその利用者の数量を増やせばよい段階つまり「量の問題」から、利用者達の満足「質の問題へ」順次移っていく。

- ア 利用者である親達は、地域子育て支援センターで、その場限りの薄っぺらな安心ではない「深い満足」を求めている。
- イ 利用者である親達は、地域子育て支援センターで、家族の一員として子育てを楽しむ自分に、「自信と見通しと余裕」を持つ事を望んでいる。
- ウ 利用者である親達は、家族の一員として、その地域の住民として、自己の人生に対する「明るい予感」を持ちたいと願っている。
- エ 自分に預けられた子供達の未来に、どのような運命が待ち受けていようと、「たとえ自分たちがいなくても、子供達は敢然としてその運命を生き抜くだろう」と期待できるようになりたいと思っている。

4-2 支援センター指導者の心

指導者達は、1人1人の母達が抱える課題と自己発揮の才能に注目してきた。イベント（親達はお客様。）は次のステージ（親達は主役。）の入り口だ。イベントが自己目的にならないように、始めから「次のステージ」を考えていること。「次のステージ」で主役になれる親達とその才能を見出していること。親達の自己発揮が支援センターの柱であること。

親達の目標イメージ

子育て雑誌「さようなら。」子育て仲間「こんにちは」
自分の人生は自分で考える。自分の中に解答・智恵はある。

指導者の基本姿勢

直接乳幼児の保育をしない。母親達を支援する。
子育ての企画と実行は親達の決断によってされる。
「魚を釣るのは母達。指導者は釣らない。」うずくその手を引っ込めて、親達レベルでの自己運動を促す。

指導者の基本の認識

子育てしている母親達こそが自己発揮・自己確認・自己満足すること。

指導者は、内科医と同様、患者の自然治癒力を回復させるしかできない。
治療の成果は、指導者の指導の直接の成果ではない。

4-3 研究者達からの助言

1994年4月「前例なし、参考例なし、指導者なし」担当者の創意工夫と情熱だけが頼りで始められた地域子育て支援センター事業は、昨今、研究者達の明確な助言と批判を受けられるようになった。

① 2002年10月

大阪の原田正文氏の「子育て支援とNPO」が出版され、私たちの重要参考文献となった。

② 2006年3月

東京の汐見和恵氏らによって「子育て支援者のコンピテンシー(能力・技能)リスト」が作成された。担当者の自己評価のための有効なチェックリストになるであろう。

(子育て支援コンピテンシー研究会 E-mail hikotoyo101@yahoo.co.jp)

② 2006年4月

雑誌「遊育」に四国の渡辺顕一郎氏らによる調査結果が発表された。指摘された問題点は3つ。

ア地域との交流の不足。

イ利用者の主体性発揮の不足

ウ父親や妊婦への働きかけの不足。

「何でもよいからやってみよう。」のレベルから、指導員の振る舞い言動も含めて子育て支援の基本方針、様々な人・物・ことの質が問われ出している。私たちは量的な整備の段階から質的な充実が求められるステージに入った。